

## 柴北川プロジェクト通信 2号

平成21年10月17日(土)・18日(日)

## 1.長谷小学校跡地の活用に向けて調査・打合せを実施(17日)

今回のプロジェクトにおける主要テーマの一つである「長谷小学校跡地の活用計画」の検討に向けて、その下調べとなる小学校校長さんへのヒアリング、及びワークショップ開催に向けた「柴北川を愛する会」との事前打合せを行いました。

## ■ 校長先生にヒアリング

前回に続き曇ひとつない秋晴れの下、朝10時に大分駅に集合した共助研からの参加者4名(前田、波多野、森脇、波木)は、波多野さん運転の車で長谷小学校に直接出向きました。早めに到着した赤星副会長、及び「愛する会」の大塚会長、渡邊事務局長と合流し、小学校校長の米光先生に約1時間程度お話を伺うとともに、校長先生の先導のもとに校内の教室、体育館などをひとつとおり視察しました。



校長先生(中央)を囲んで

教室の窓からは、山桜自生地である松巖寺の裏山が眼前にそびえて見え、一同は早春時における山の彩りに思いをはせました。

## ◆ 米光校長先生のお話から

## ① 過去の主だった学校行事について

- ・地域との交流を活発に進めています。

○秋季大運動会：この地域の特徴として、「長谷小学校区教育後援会」が結成されており、8年前から後援会種目がありました。婦人会の参加や中学生種目も。

○長谷文化祭：学習サポーターに支えられて発表会をしています。テーマとしては、「大豆からの豆腐づくり」や「ジャンボかぼちゃの栽培」など。

今年は、12/6(ワークショップの次の日)に開催します。

○地域サポーター：犬飼公民館にコーディネーターが常駐して、地域の人材活用を。

○いきいきサロン：地域のお年寄りとの交流。子供による国語の音読発表やお年寄りへのインタビューなど。お年寄りからは昔の遊びを教えてもらう。

○「愛する会」との交流：子供河童クラブに参加して、川の水質検査や大野川の源流探訪などに参加しています。

## ② 廃校後の活用に対する校長先生の想い

- ・長谷地区の文化センターとしての役割が重要です。
- ・地域の高齢化に対して、リハビリのできる「デイサービス施設」のような使い方もあります。
- ・グラウンドを使って野菜を作り、地域の料理として出すことも考えられます。



米光校長先生

## ■ 「愛する会」との打合せ

小学校を後にした一同は、そのまま黒松地区の公民館に移動し、「愛する会」の甲斐副会長や大塚会長のお姉さんなどのご婦人連による豚汁などの昼食の饗応に舌鼓を打ちました。



会議の様子

13時半からは、「愛する会」から8名の出席を得て、小学校跡地活用をテーマとするワークショップの進め方及び参加者募集の進め方について会議を行い、ワークショップの名称を「話し合う会」とすること、長谷地区全世帯に参加案内をまわすこと、第1回は11/15(日)の13~16時、第2回は12/5(土)の19~21時でいずれも小学校体育館で開催することなどを決定しました。

### ◆ 学校活用に関するワークショップの進め方等に関する協議事項

- ① ワークショップについて
  - ・地域全体は、「長谷地域」が正称。(柴北地域とすると、長谷地域の最下流地区を指す。)
  - ・「考える会」とすると重く受け止められるので、「話し合う会」とする。
  - ・「考える会」の主催はあくまで「愛する会」とし、共助研はサポート役として位置付ける。
- ② 参加の呼びかけについて
  - ・一部の人たちが勝手にやっていると受け取られないように、地域の全世帯に参加を呼びかける。
  - ・チラシを350部用意し、「愛する会」の地区役員が配布し、回収する。
  - ・チラシの作成は、共助研が行って送付し、月末までに募集を締め切る。(チラシのプリント費用は、山村再生プランの交付金を充当する。)
- ③ ワークショップの日程等について
  - ・第1回：11月15日(日)13~16時
  - ・第2回：12月5日(土)19~21時(翌日が、長谷文化祭)
  - ・会場は、いずれも長谷小学校体育館
- ④ その他
  - ・できれば、第1回に参加者が校舎内を見学できるよう調整する。
  - ・小学校校歌のテープを確保し、ワークショップで適宜流す。
  - ・活用計画の実行については、「長谷地区開発協議会」や教育後援会に適宜移譲したい。
  - ・校舎の使用については、3年間ぐらいのお試し期間で無償提供してもらい、いろいろと試して見れば良いのだが。市と調整する。



大塚会長(左)と後藤副会長(右)



柴北川レディース(中央が甲斐副会長)

## ■ 長谷のズワイガニ（？）の饗宴へ

会議終了後に、当会参加者は宿泊先の三重町へと移動しかけましたが、大塚会長から「もずくガニ（川ガニ）が卵を抱えて旬だけど食べていかないか？」と「待った」がかかりました。地域の珍品を食することにかけては是非もない当会参加者は、車で来ていることも忘れて、生の焼酎を喉で転がしながら「もずくガニ」（大塚会長曰く“長谷のズワイガニ”）にむしゃぶりついた次第です。

結局、三重町のホテルまでは、幸野さん（勿論、カニは食べただけ飲んでいません）の車で送ってもらいましたが、カニパワーでざらざらの当会参加者一同は、当然のごとく夜の三重町界隈へと繰り出しました。三重駅前通りの焼鳥屋（最初顔を出した際には、何故か入店を断られた店）では、これからのコンサル業界事情や当会の行く末などが熱く語られましたが、ホークスのCSシリーズ敗退の報道で少し氣勢をそがれ、日付が変わる前にホテルに帰還しました。



長谷のズワイガニ（？）

## 2. 地域と都市との交流として、DMC 聖地巡り、神楽見学を実施。（18日）

翌日18日（日）は、黒松地区での秋の恒例行事「黒松神楽」が、地区内の黒松阿蘇神社で奉納される一大イベントの日でした。

共助研は、中山間地域支援の一環として「都市と農山漁村との交流のつなぎ役」を任ずることを旨として結成されたので、この機会を逃してはならじと、案内チラシを作成し建コン協会ホームページ等で宣伝するなどして、黒松神楽への都市部からの参加を呼びかけていました。

### ■ 盛況のDMCロケ地巡り

さてその当日、空は昨日に続いて晴れ渡り、まさにこの秋一番の神楽日和（？）となりました。

前夜の酔いがさめやらぬ一同は、愛する会の渡邊さんの出迎えにより、ホテルから、車を置いたままの黒松公民館まで送り届けてもらいましたが、途中「犬飼石仏」と「河童小屋」という犬飼の二大観光名所（？）に案内していただき、当地の由緒ある歴史と豊かな自然に改めて感服させられました。

午前中の残りの時間を使って一同は、三ノ岳のなかよしパークから栗ヶ畑集落と周って長谷地域の「奥の院」を探訪したのち、昼食をとって市役所の犬飼支所に出向きました。

今回の神楽が奉納される黒松阿蘇神社が、映画「デトロイト・メタル・シティ（DMC）」（今ときめく松山ケンイチ主演）の舞台であることを案内チラシで宣伝するために、映画の撮影風景の写真提供をお願いした縁から、ご当地ロケを仕切った犬飼支所の河野さん（マンガのDMCでは実名で登場）からロケ地の案内をしていただく話がトントン拍子で進み、その集合場所である犬飼支所に向かったわけです。



神楽の紹介チラシ

支所前には、当会の矢ヶ部さん、幸野さん達も既に到着しており、何と12名の巡礼者が集まりました（当会以外の純粹の一般参加者は5名でしたが）。巡礼者一行は、河野さんによる撮影秘話を交えた楽しい解説を聞きながら、支所内の映画関係展示室、スーパーあべよし、大野川沿いの桜並木、橋本書林などのDMC聖地を巡り、最後には映画冒頭のシーンで登場する母娘お二人にもお会いするというサプライズが用意されて、大いに感激していた様子でした。（映画を見ていない人には、何のことやら、と言う感じでしょうが。）今回は時間の余裕がない中での宣伝でしたが、もっと早くから準備をすれば、さらに多くの参加を得ることができると確信しました。



DMCロケ地巡礼（左端が支所の河野さん）

### ■ 躍動的な黒松神楽に圧倒される

ロケ地巡礼の一行は、そのまま本日のメインイベント会場の黒松阿蘇神社に向かいました。（濱田さんが現地で合流）

稲刈りの終わった田の中に伸びる参道沿いに幟が立ち、神社社殿を舞台として既に神楽が始まっていました。

近在の人々が社殿を取り囲んで見入っているなかを、太鼓や笛の合奏に乗せて二匹の獅子が舞っており、その熱い躍動に引き寄せられるように外来者である我々が入って行きました。

地域の人々の中で、見慣れない人が大勢やってきた、という少し排他的な空気が流れるかと懸念しましたが、大塚さんや渡邊さんを始めとする「愛する会」の方々から「よく来たね」と気軽にあいさつをしていただくことで、そのような懸念が全く不要であることがわかりました。



黒松阿蘇神社



青年団による獅子舞に続いて、長谷小学校児童による子供神楽が奉納されました。江戸時代からの伝統を受けついで一生懸命に踊る子供たちの姿に、今後の地域コミュニティの継続を確信しつつも、小学校という地域シンボル無きあとの新しい仕組みや仕掛けづくりの重要性を痛感しました。

イチイガシのご神木の下で、舞の終わった青年団の人々による車座の酒宴の中に加えてもらい、楽しく語らった深秋の午後のひとは、当会参加者にとって、この秋を彩る最も印象深い思い出となりました。

延々と続く神楽の舞と音曲に後ろ髪をひかれながら、夕陽が山の端に隠れる前に、一同は長谷地区を後にしました。



（以上、文責：波木）